

若年者の育児意識調査について

A study of young people's opinions concerning childcare

益 邑 千 草

Chigusa Masumura

要約

平成 15 年度に、厚生労働省の研究班「育児不安軽減のための小児科医の役割とプレネイタルビジットの評価に関する研究」において「若年女性の育児に対する意識調査」を担当した。本学において第 1 段階の調査を実施して学生の意見を聞き、アンケート調査の内容を調整したので、その過程を報告する。

育児体験や少子化に対する意見など、積極的に意見を述べるとともに、調査に対する理解と協力の姿勢が見られた。育児体験や生育歴を振り返ることの重要性を認識し、少子化の実態を見極めてその原因を探り、保育制度や保育施設など育児を支援するシステムを充実させることをめざしている若い世代の姿勢が把握できた。同時に、アンケート調査という日常的な調査方法も、質問内容や実施方法などの工夫により、有効な手段であることを再認識した。

キーワード：育児、子育て、意識調査、育児体験、生育歴、少子化、少子化対策、育児支援、保育システム

目次

- I はじめに
- II 厚生労働科学研究費について
- III 共栄短大における「子育てに関する意識調査」について
 - 1 調査内容
 - 2 調査結果
 - 【1】 あなた自身と身の回りのことについて
 - 1) 性別について
 - 2) 満年齢について
 - 3) 結婚しているかどうかについて
 - 4) 子どもの有無について
 - 5) 子どもはほしいかどうかについて
 - 6) 結婚したいかどうかについて
 - 7) 結婚後、子どもはほしいかどうかについて
 - 8) きょうだいの人数について
 - 9) 同居家族の人数について
 - 10) 同居家族に乳幼児がいるかどうかについて
 - 11) 身の回りで乳幼児と触れ合う機会があるかどうかについて
 - 【2】 育児体験と生育歴について
 - 1) 哺乳瓶でミルクを飲ませる
 - 2) おむつを換える
 - 3) 排便・排尿の介助
 - 4) 一人で乳幼児の世話をする
 - 5) 自分の母子手帳を見たことがある
 - 6) 誕生時の状況を親からきいたことがある
 - 7) 子育ての苦労話を親からきいたことがある
 - 8) 自分自身の育てられ方について
 - 【3】 少子化の原因について
 - 【4】 少子化に関して、今後の予測と対策について
 - 1) 少子化の今後の予測について
 - 2) 少子化対策について
 - 3) 少子化対策の内容について
 - アンケートについての感想
- IV 「若年女性の育児に対する意識調査」について

- 1 目的
 - 2 調査対象者と調査実施時期
 - 3 調査方法
 - 4 調査内容
 - 5 調査結果について
- V 考察
- VI 終わりに

I はじめに

厚生労働省の研究補助事業である子ども家庭総合研究の「育児不安軽減のための小児科医の役割とプレネイタルビジットの評価に関する研究」に分担研究者として参加し、平成15年度において「若年女性の育児に対する意識調査」を担当した。

アンケート調査の内容について、共栄学園短期大学において第1段階の調査を実施して意見をきき、内容を再検討したので、その過程を報告する。

II 厚生労働科学研究費について

厚生労働科学研究費補助金は、「厚生労働科学研究の振興を促し、もって、国民の保健医療、福祉、生活衛生、労働安全衛生等に関し、行政施策の科学的な推進を確保し、技術水準の向上を図ること」を目的としている。

平成15年度の厚生労働科学研究は、約417億円の研究費により4つの分野にわたる研究を支援している。

このうち、子ども家庭総合研究は、総合的プロジェクト研究分野において、「乳幼児の障害の予防、母性及び乳幼児の健康の保持増進並びに児童家庭福祉の向上に資することを目的とする研究」を行っている。平成15年度においては61の研究が実施された。

このうち、「育児不安軽減のための小児科医の役割とプレネイタルビジットの評価に関する研究」は、東邦大学医学部多田裕教授を主任研究者として、平成13年度から平成15年度まで計3年間継続して行った。

筆者は、平成14年度は研究協力者として参加し、平成15年度は分担研究者として、「若年女性の育児に対する意識調査」を担当した。

研究に係る予算については研究期間内に執行し、その成果は厚生労働省の研究報告書に記載した。また、この研究の一環として得た調査結果は、当該研究以外に用いることはできない。しかし、公費で実施された研究が活用されるためには、プライバシーの保護等、

必要な配慮を講じた上で、内容について更に検討し、成果を詳しく公表すべきであろう。

Ⅲ 共栄短大における「子育てに関する意識調査」について

1 調査内容

平成15年7月、児童福祉専攻の2年生の学生に、資料1のアンケートを実施した。

2 調査結果

調査結果については、資料2にまとめた。

今回のアンケート結果の分析には、問題の性質上、性別別・年齢別・未婚既婚の別、子どもの有無などの点との関連について回答を分析すべきである。しかし、短大の調査については、後述のように男性が2名と少ないため、男女別に結果の数字を掲げると個人が特定される可能性がある。

従って、ここでは敢えて男女全体の数字を掲げた。研究班内部の検討では、基礎のデータを扱っている。

資料 1

若い男女の子育てに関する意識調査(アンケート)

はじめに

子どもたちのこころの健康を保ち、子どもたちが活き活きと、伸び伸びと育つようにするためには、どうすればよいでしょうか。

出生前診断や児童虐待の予防など、さまざまな問題について考えてきましたが、皆さんの意見をもとにして、結婚前の若い男女への働きかけと、乳幼児の子育て中の母親・父親への働きかけを考えてみたいと思います。

まず、それぞれの人々が子育てについてどのように考えているのか、意識調査を考えてみます。

1) 若い男女の子育て意識のアンケート調査

- ・対象者は、高校・大学・短大・専門学校などの学生
- ・学年もしくはクラス単位でアンケートをとるため、既婚者・既産婦も含まれる可能性があり、質問事項はそれに対応するものとなります。

2) 乳幼児の子育て中の母親・父親へのアンケート

- ・保育園・幼稚園に子どもをあずけている保護者
- ・乳幼児健診の受診者の保護者
- ・育児グループに参加した母親

1) について、皆さんの意見をもとにしてアンケートの質問をつくりました。

まず、皆さん自身がアンケートに答えてみてください。

そのうえで、アンケートのとり方について、意見を述べてください。

厚生科学研究（子ども家庭総合研究事業）に、「育児不安軽減のための小児科医の役割と、プレネイタルビジットの評価に関する研究」（主任研究者：東邦大学医学部多田裕教授）という研究班があるのですが、私は、平成15年度は、この分担研究者として、「若年男女の育児に対する意識調査」を担当することになっています。研究報告書にこのアンケートの一部を引用することがあります。

アンケート調査について

- ・対象者は、高校・大学・短大・専門学校などの学生

・学年もしくはクラス単位でアンケートをとるため、既婚者・既産婦も含まれる可能性があり、質問事項はそれに対応するものとなります。

[1] あなた自身と身の回りのことについておたずねします。当てはまるものを○で囲んでください。()の中には数字を入れてください。

1) 性別 (男性・女性)

2) 満年齢 () 歳

3) 結婚していますか (既婚・未婚)

「既婚」と答えた方は4)へ進んでください

「未婚」と答えた方は6)へ進んでください

4) 3)で「既婚」と答えた方にうかがいます。

(子どもあり・子どもなし)

5) 3)で「既婚」と答えた方にうかがいます。

子どもはほしくないですか、何人くらいほしいですか。

(ほしい () 人・ほしいとは思わない)

8)へ進んでください

6) 3)で「未婚」と答えた方にうかがいます。

将来、結婚したいですか。(はい・いいえ・わからない)

「はい」と答えた方は7)へ進んでください

「いいえ・わからない」と答えた方は8)へ進んでください

7) 6)で「はい」と答えた方にうかがいます。

結婚したら、子どもはほしいですか。

(ほしい・ほしいとは思わない・わからない)

8) あなたは何人きょうだいですか(あなた自身を含む) () 人

9) 同居している家族の人数(あなた自身を含む) () 人

10) そのうち、就学前の乳幼児がいますか (はい・いいえ)

11) 現在、あなたの家族・親戚・近所の人・友人・知人など身近な人で、就学前の乳幼児を育てている人がいますか。(はい・いいえ)

[2] あなたの子育て体験についてうかがいます。

1) あなたは、赤ちゃんにほ乳瓶でミルクを飲ませたことがあ

りますか。(はい・いいえ) ()

2) あなたは、赤ちゃんのおむつを換えたことがありますか。(はかせるタイプ、パンツ式のおむつをのぞく) (はい・いいえ)

3) あなたは、おまるで子どもに排便・排尿をさせたことがありますか。(はい・いいえ)

4) あなたは、ベビー・シッターをしたことがありますか(有償・無償にかかわらず)(あなた一人で乳幼児の世話を何時間かしたことがありますか) (はい・いいえ)

5) あなたは、自分の母子手帳を見たことがありますか (はい・いいえ)

6) あなたは、自分が生まれたときのようすを親(母親もしくは父親)にきいたことがありますか。(はい・いいえ)

7) あなたは、子育ての苦労話を親(母親もしくは父親)にきいたことがありますか。(はい・いいえ)

「はい」と答えた方へ それはどんなことでしたか(簡潔に(例：夜泣きがひどかった)()

「いいえ」と答えた方は19)へ進んでください

8) あなたは、自分の育てられかたについて、できればこんなふうにしてほしかったと思うことはありますか。(はい・いいえ)

「はい」と答えた方へ

それはどんなことでしたか(簡潔に)()

「いいえ」と答えた方は[3]へ進んでください

[3] 近年、日本では出生数が減り、合計特殊出生率の低下も続いています。

少子化の原因として、考えられることはどんなことですか。

あなたの考えに近いものに○、最も近いものに◎をつけてください。

「その他」に○をつけた方はその内容を()内に簡潔に書いてください。

() 1) 子育てに費用がかかりすぎる(出産費用・おけいこごと・学費など)

2) 子育てするには、住宅事情がよくない(子育てにふさわしいのは、広い・子どもの泣き声や騒ぐ音を容認してくれる・子ども部屋が用意できるなど)

3) 望ましい子どもに育てるには親が手をかける必要があるので、少人数しか育てられない。

4) 女性がやりがいのある仕事を持ち、出産や育児は、仕事と両立する条件でのみ希望するようになった

5) 結婚すれば子どもをつくるのがふつうという考えの人が減ってきた。

6) 老後を子どもに養ってもらうために子どもを産むという考える人が減ってきた。

7) 一人っ子は育てにくい、一人っ子は社会性が育ちにくいなどと、一人っ子を否定的に考える人が減ってきた。

8) 既に生まれたが女の子だから、男の子が生まれるまで次々と子どもを産むという考えの人が減ってきた。

9) 育児をサポートする保育システムが充分でないから

() 10) その他()

[4] 今後の動向について

1) 今後も少子化が続くと思いますか。(はい・いいえ・わからない)

2) 少子化を止めるような施策をとるべきだと思いますか。(はい・いいえ・わからない)

3) 「はい」と答えた方へどのような対策をとればよいと思いますか。

主なものを3つまで、挙げてください。

() () ()

●このアンケートについて、自由に意見を述べなさい。

— 237 —

【1】あなた自身と身の回りのことについて

1) 性別について

男性が2名、女性が74名、計76名であった。

2) 満年齢について

満19歳が56人で73.7%を占め、平均年齢は、19.3歳であった。

3) 結婚しているかどうかについて

未婚か既婚かについては、未婚と記入した人が96%であり、既婚もしくは記入のない人はごく少数であった。

4) 子どもの有無について

5) 子どもはほしいかどうかについて

上記の理由により、4) 及び5) は省略する。

6) 結婚したいかどうかについて

「未婚」と答えた人に、将来、結婚したいかどうかたずねたところ、「はい」が66人で86.8%であった。「いいえ」は2人、「わからない」は8人であった。

「将来、結婚するつもりですか」という問いと、次の「もし結婚したら、子どもはほしいですか」という問いは、簡単なようでむずかしい質問である。ある程度考えがはっきりしている人もあれば、きかれる度に答えが異なるということもありうる質問であろう。

7) 結婚後、子どもはほしいかどうかについて

6) で「はい」と答えた人66人に、結婚したら子どもはほしいかどうかたずねたところ、「ほしい」が65人と大多数で、「わからない」が1人であった。

今回は、他の施設での結果との比較は掲げていないが、児童福祉学専攻の学生という特質が出ていると思われる。

8) きょうだいの人数について

自分自身を含めたきょうだいの数をたずねた。平均すると、2.43人で、2人きょうだいが最も多くて44名(57.9%)、3人きょうだいが26名(34.2%)、4人きょうだいが1名、5人きょうだいが2名、一人っ子は2名であった。

9) 同居家族の人数について

自分自身を含めた、同居している家族の人数は、4人家族が34名で44.7%、5人家族が15名で19.7%、合わせると64.4%を占める。平均は4.37人で最も家族の人数が多いのは9人家族であった。

10) 同居家族に乳幼児がいるかどうかについて

同居している家族の中に、就学前の乳幼児がいるかどうかをたずねたところ、「はい」は1人だけで、「いいえ」が72人であった。

11) 身の回りで乳幼児と触れ合う機会があるかどうかについて

「現在、あなたの家族・親戚・近所の人・友人・知人など身近な人で、就学前の乳幼児を育てている人がいますか」とたずねたところ、「はい」は 52 人 (68.4%) であった。

家族だけでなく「身近な人」まで広げて、乳幼児と触れ合う機会の有無をたずねたわけである。どこまでを身近というのか曖昧な問いではあるが、乳幼児と触れ合う機会が決して多くはないという実状がわかる。

「はい」と答えた人の同居家族の人数をみたところ、上記のように同居家族に乳幼児がいる人は 1 人であるにもかかわらず、同居家族の数が 5 人、6 人、7 人、9 人と多い人は、この問いに「はい」と答えている率が高い。

今回の調査では推測の域を出ないが、同居家族の多い家庭は、親戚や知人とのつきあいも頻繁であるなど、暮らしぶりに差がある可能性がある。

【2】育児体験と生育歴について

子育ての体験については、児童福祉学専攻における保育園等での実習を経験しているので、そのことも考慮すべきである。

1) 哺乳瓶でミルクを飲ませる

赤ちゃんに哺乳瓶でミルクを飲ませたことがある人は 75.0% であった。

2) おむつを換える

赤ちゃんのおむつを換えた経験がある人は 97.4% であった。

3) 排便・排尿の介助

おまるで子どもに排便・排尿をさせたことがあるのは 71.1% であった。

4) 一人で乳幼児の世話をする

ベビー・シッター、もしくは一人で乳幼児の世話を何時間かしたことがあるのは、17.1% で、80.3% は「いいえ」と答えている。上記のような具体的な子どもの世話に加えて、遊び相手をしたとか、危険がないよう見守っていたなども含めて、広い意味での子どもの世話について問うたが、記入なしが 1 人、はいといいえの中間に○をつけた人が 1 人あった。

5) 自分の母子手帳を見たことがある

89.5% の人が、自分の母子健康手帳を見たことがあると答えた。これは、講義の中で母子手帳を扱い、注意を喚起することとも関連があるようである。

6) 誕生時の状況を親からきいたことがある

自分が生まれたときの様子を両親からきいたことがあるのは 85.5% であった。

7) 子育ての苦労話を親からきいたことがある

子育ての苦労話をきいたことがあるのは、約 65.8% であった。

その具体的な内容は、

「なかなか母乳を飲まなかった」「長い時間寝ていた」「食べ物の好き嫌いがはげしかった」「よく食べるがよく下痢をする子だったらしい」「偏食で調理工夫にすごく悩んだ」「便秘気味だった」

「指しゃぶりがなかなかやめられなかった」「なかなか成長しなかった」「なかなか言葉を話せなかった」「家以外ではあまり話さず、保育所で話さなかった」「目を離すとなくなっている」「ひとりであちこち行ってしまう」

「よく泣いてばかりいた」「知らない人を見ると泣いてしまった」「人見知りがすごく知らない人をみるとすぐ泣いていた」「母がいないときに大泣きしていた」「おじいちゃん子でおじいちゃんと離れるのが嫌で保育園へ行かせるのが大変だった」「父がメガネをかけているのでメガネをかけている人を父だと思い、ついていってしまったらしい」「夜泣きしてたいへんだったらしい」「夜に何度も起きた」「必ず朝4時に泣く」

「夜泣き。近所の人から苦情を言われた」「夜泣き。自分の時間が無い。夫にイライラ」「育児に追われた」「布団に寝かせると泣いてしまうため、毎日母に抱かれて寝ていた」「とても甘えん坊ですぐに抱っこしてと言っていた」

「活発な子でケガが多かった」「いたずらっ子」

「アトピーでかゆがったりした」「なかなか毛が生えてこなかった」

「食物アレルギーがひどく、母親も食べ物にとっても気をつけた」「斜頸でいろいろな病院へ行き、たいへんだった」「未熟児だった」「夜中に喘息が出て大変だった」「脱水症状になった」「ひきつけた」

「毎週かぜをひいて病院通いをしていた」「体が弱かった」「病気がちだった」「入院が多かった」

など、さまざまな内容が、かなり生き活きと書かれていた。自分が育てる側に立ったときに役立つことも多いのではないかと思われる。中には、

「子どもの頃の話はしてくれたが、苦ではなかったと聞いた」

というコメントもあった。親の姿勢が察せられる。

8) 自分自身の育てられ方について

「自分の育てられかたについて、できればこんなふうにしてほしかったと思うことはありますか」という問いに対しては、26.3%がはいと答え、いいえは63.2%で、記入なしが比較的多く10.5%であった。

「はい」について、その具体的な内容は、

「もう少し、自由に育ててほしかった」「自由にのびのびと」「もっとたくさん話しかけてほしかった」「もう少し小中学校の時、自分の意見を聞いてほしかった」「少し過保護だったかなと思う。今はよくても将来自立できるか不安です」「家族みんなでもっ

とかかわる時間がほしかった」「もっと叱るべき時には強く叱ってほしかった」
などと書かれていた。

短い表現であるが、悲鳴に近いものもある。

「なぐらないでほしかった」「あんまりたたかないでほしかった」「外に出したりとか(しないでほしかった)」

きょうだいへの対処は常に問題になっている。

「兄といつも比べられたので、それはしてほしくなかった」「妹と平等に育ててほしかった」

母親の就労の問題、自分自身はどう解決するのであろう。

「母がすぐに仕事に復帰したので、祖父母に面倒をみてもらった。母ともっと一緒にいたかった」「(母が) 仕事に戻るのが早かったから……」

「母は私を産んで 90 日で仕事に出た。もっと接してほしかった」「もっとそばにいてたくさん良い話をしてほしかった」「一人遊びが多くさびしかった」

中には「小さい頃からスノーボーに連れて行ってほしかった」

というのもあった。

自分が子育てをするときには、これらの点をどうするのか改めて考えることであろう。

【3】少子化の原因について

「近年、日本では出生数が減り、合計特殊出生率の低下も続いています。少子化の原因として、考えられることはどんなことですか。あなたの考えに近いものに○、最も近いものに◎をつけてください」

このような質問は、選択肢に偏りができ、答えを誘導してしまう可能性がある。少しでも偏りを防ぐため選択肢を増やし、9つの短文が並ぶことになった。◎も○も記入がなかったのは1人で、その他に○をつけて自分の考えを書いた人が8人あった。

今回は、◎と○を単純に集計をしたが、○は「いくつでも」、◎は「ひとつだけ」つけてください、と強調しておくべきであった。◎印の記入がなかった16人のうち、1人は○も記入がなかった人で、15人は○を1～5個つけていた。一方、◎を複数個つけた人が18人あった。

◎印では、4)「女性がやりがいのある仕事を持ち、出産や育児は、仕事と両立する条件でのみ希望するようになった」が最も多かった。次いで1)「子育てに費用がかかりすぎる(出産費用・おけいごと・学費など)」が多く、5)「結婚すれば子どもをつくるのがふつうという考えの人が減ってきた」、9)「育児をサポートする保育システムが充分でないから」と続く。

○印では1)が群を抜いて多く、5)、4)、9)と続く。次いで3)「望ましい子どもに育

てるには親が手をかける必要があるので、少人数しか育てられない」が多い。

これらは、高等学校、大学などの調査結果とほぼ同様の傾向であった。

10)「その他」に◎をつけた人が自由記載の欄に書いたことは、

「若い夫婦が増えてきているため、精神的・体力的・金銭的に子どもを育てるのは大変」
同じく、10)に○をつけた人が自由記載の欄に書いたことは、

「結婚することが女性の幸せではないという考え方も増えてきたから」

「自分自身の人生を自由に楽しみたいと思う人が出てきて、子どもをつくろうと考える人が減ってきている」「子どもを育てようという意欲がない、産めないような体になってしまった人は増えつつある」

「子どもを育てるには責任も労力も必要であり、それをが定かではないから」「一人の子どもにしぼり、教育費をかけているため」「子どもをたくさん産む必要がないから」などであった。

【4】少子化に関して、今後の予測と対策について

1) 少子化の今後の予測について

今後も少子化が続くと思うかどうかについてたずねたところ、「はい」が48.7%、「わからない」が39.5%で意見が分かれた。続くかも知れないし、何ともいえないというところであろう。難しい問いであり、それぞれ自分なりに考えた上での答であると考えられる。

2) 少子化対策について

少子化を止めるような施策をとるべきだと思うかどうかについてたずねた。曖昧な表現となったのは、少なくとも「産めよ、増やせよ」という対策ではないという趣旨である。結果は「はい」が68.4%、「わからない」が22.4%であった。

3) 少子化対策の内容

2)で「はい」と答えた人に少子化対策の具体的な内容をきいたところ、以下のような回答があった。

○経済的な面から

「景気をよくする」「社会の不安定をなくす」「経済的支援」「夫婦が共働きでなくても子育てができるように、経済的な育児の支援を社会に広める」「出産や育児にかかる費用の援助」「子どもを産んだら国から手当を出す」「国がもっと育児のための資金の援助をする」「学費を下げる」「児童手当を増額」「3人目が産まれたら市町村から賞金を贈る」「子どもの数に比例して給料を増やす」「子どもが多い家庭への税金免除」「産休が誰でもとれて給料も出るようにする」

○育児を支援する体制

「安心して子どもを産めるような状況を整える」「出産しやすい環境をつくる」「子どもを産んでも働きやすい社会にする」「女性が赤ちゃんを産んだ後もきちんと社会に戻れるようにする」「安心して子どもを育てられる環境づくり」

「育児を援助するシステムを強化する」「産休を取りやすくする」「産休や育児休暇は社会的に見て改善する必要がある。制度を充実させる」「参観日や看護など子育てをするために必要な休暇をとれるようにする」

○保育所などの施設・制度

「女性が働きやすいような環境をつくり、安心して子どもを預けられる施設を増やす」「保育所の数、延長保育をする保育所を増やす」「保育時間を長くする」「育児をサポートする保育システムを充実させる」「育児する人を援助するシステムをしっかりとさせる」「いろいろな保育ニーズに対応できる保育所を増やす」

○指導・相談の体制

「両親学級を就学前くらいまで続ける」

○父親の育児への参加

「父親の育児参加。育児の完全2分化、もしくは共同化」「夫婦間の信頼関係などをよりよいものにする」

○母と子を取り巻く環境：家庭とその周囲の周辺

「周りの協力を得る」「母親の周りの人がもっと育児に興味を示し、助ける」

○より広範囲の啓発として

「子どもという利益のすばらしさを知らせる」「子どもを産むとこんなよいことがあるとアピールする」「きょうだいの大切さを知らせる」「子どもの大切さをみんなが自覚するように催し物をやる」「もっと国民的に子どもがほしいなど言うように、子どもや育児に関心を高めさせる」「もっと国全体で運動をしたらいい」「若い人が乳幼児と関わるができる場をつくる」

など、一部は選択肢の内容と重複するものもあったが、自分なりの表現で書いていて、積極的な姿勢が表れていた。

●アンケートについての感想

最後に、このアンケートについて、自由に意見を求めたところ、以下のような回答があった。「少子化はとても深刻な問題だと思う。この状況をどうにかして変えなければならないと思いました」「自分の小さい頃のお母さんの心境と、自分や現代の人の自分の子どもへの考え方はちがうと思った」「子どもはほしいがあまり結婚はしたくない気もする、私は。しかし、現実を考えると、やはりお金で決める事が多いと思うから産みたくても産めない人、育てられない人がいると思う」「私は学校で子どもや家庭という保育のこ

とを勉強しているのである程度のことは知っているが、何も勉強をしていない人はきっと意識が低いのではと思います」「今は親が若い人が多いから子どもを産んでも育てられない人が多い。そういうのを止める対策が必要だと思う」「今は出生率が低下しているが、誰もが子どもを産まなくなるわけではないので、いずれは一定になると思う。少子高齢化でこれからの人は負担が大きくなっていくと思われるが、人の機能が低下するにつれて経済成長もストップさせて、ゆとりのある国づくりに移った方がよいと思う」「高齢化が進むと、子どもが本当に減ってしまい、ますます高齢化が進む一方なので、国ももっと対策をとるべきだと思う。女性の仕事と育児の両立はとても難しいと思うが、その方が育児にとらわれてストレスがたまるということが減ると思う」「興味を引くアンケート内容で答えていて楽しかったです」「みんながどう思っているのか知りたいです」

資料2

問1 1) 2)

	19歳	20歳	21歳	22歳	計
男性	1	0	0	1	2
女性	53	18	1	0	74
計	54 (73.3%)	18 (23.7%)	1 (1.3%)	1 (1.3%)	76(100.0%)

平均年齢 19.3 歳

問1 10)

	人数
はい	1 (1.3%)
いいえ	74 (97.4%)
記入なし	1 (1.3%)
計	76 (100.0%)

問1 3) 4) 5)

本文参照

問1 6)

	人数
はい	66 (86.8%)
いいえ	2 (2.6%)
わからない	8 (10.5%)
計	76 (99.9%)

問1 7)

	人数
ほしい	65 (98.5%)
ほしいとは思わない	0 (0.0%)
わからない	1 (1.5%)
計	66 (100.0%)

問1 8)

きょうだいの数	人数
1人	2 (2.6%)
2人	44 (57.9%)
3人	26 (34.2%)
4人	1 (1.3%)
5人	2 (2.6%)
記入なし	1 (1.3%)
計	76 (99.9%)
平均	2.4人

問1 9)

同居家族	人数
1人	6 (7.9%)
2人	4 (5.3%)
3人	1 (1.3%)
4人	34 (44.7%)
5人	5 (19.7%)
6人	7 (9.2%)
7人	7 (9.2%)
8人	0 (0.0%)
9人	1 (1.3%)
記入なし	1 (1.3%)
計	76 (99.9%)
平均	4.3人

問1 11)

	人数
はい*	52 (68.4%)
いいえ	24 (31.6%)
記入なし	0 (0.0%)
計	76 (100.0%)

*「はい」と答えた52名について

9) の同居家族の人数

同居家族	人数
1	1
2	4
3	1
4	15
5	9
6	5
7	6
8	0
9	1
計	52

問 2 1)

	人数
はい	57 (75.0%)
いいえ	19 (25.0%)
記入なし	0 (0.0%)
計	76 (100.0%)

問 2 4)

	人数
はい	13 (17.1%)
いいえ	61 (80.3%)
中間に○	1 (1.3%)
記入なし	1 (1.3%)
計	76 (100.0%)

問 2 7)

	人数
はい	50 (65.8%)
いいえ	26 (34.2%)
記入なし	0 (0.0%)
計	76 (100.0%)

問 2 2)

	人数
はい	74 (97.4%)
いいえ	2 (2.6%)
記入なし	0 (0.0%)
計	76 (100.0%)

問 2 5)

	人数
はい	68 (89.5%)
いいえ	6 (7.9%)
記入なし	2 (2.6%)
計	76 (100.0%)

問 2 8)

	人数
はい	20 (26.3%)
いいえ	48 (63.2%)
記入なし	8 (10.5%)
計	76 (100.0%)

問 2 3)

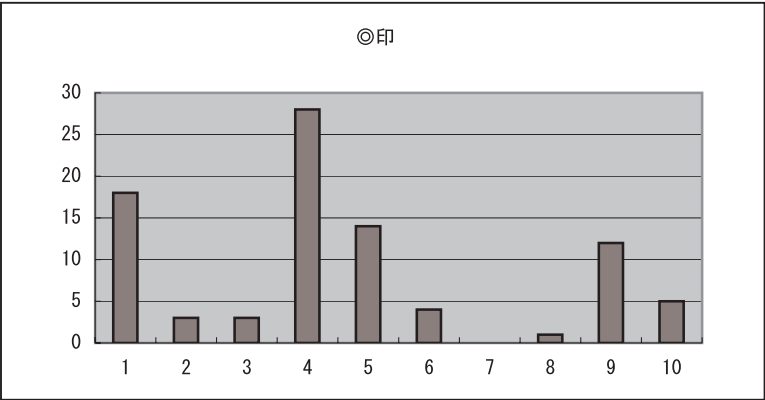
	人数
はい	54 (71.1%)
いいえ	21 (27.6%)
記入なし	1 (1.3%)
計	76 (100.0%)

問 2 6)

	人数
はい	65 (85.5%)
いいえ	9 (11.8%)
記入なし	2 (2.6%)
計	76 (99.9%)

問 3 ◎印

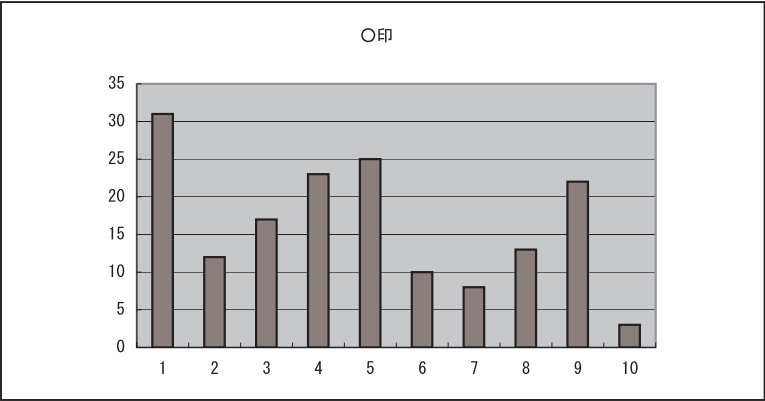
	回答数
1	18
2	3
3	3
4	28
5	14
6	4
7	0
8	1
9	12
10	5
計 (延べ)	76
◎印記入なし	16



◎印記入なしの 16 人のうち、 ◎印を複数つけた人 18 名
◎印も○印も記入なしの人が 1 人 2 個：18 人、3 個：3 人
○印を 1 ～ 5 個つけた人が 15 人 4 個：2 人、5 個：1 人

問 3 ○印

	回答数
1	31
2	12
3	17
4	23
5	25
6	10
7	8
8	13
9	22
10	3
計 (延べ)	164
○印記入なし	1



問4 1)

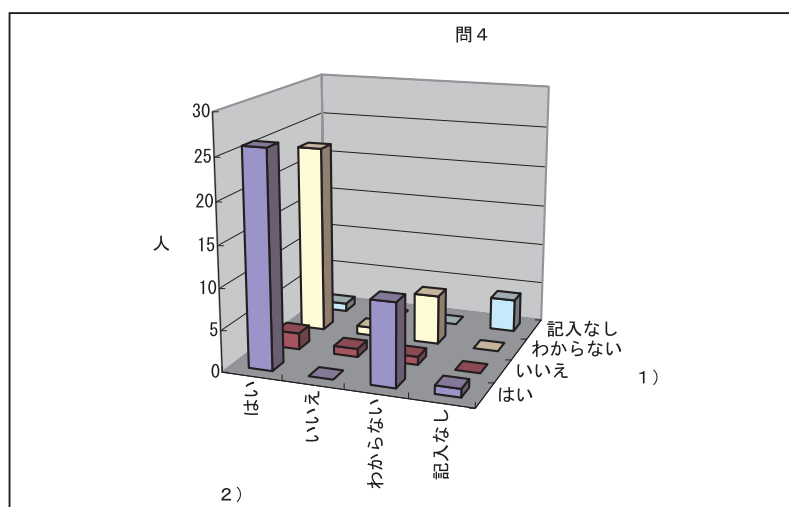
	人数
はい	37 (48.7%)
いいえ	4 (5.3%)
わからない	30 (39.5%)
記入なし	5 (6.6%)
計	76 (100.0%)

問4 2)

	人数
はい	52 (68.4%)
いいえ	2 (2.6%)
わからない	17 (22.4%)
記入なし	5 (6.6%)
計	76 (100.0%)

問4 1)と2)

		はい	いいえ	わからない	記入なし	計
1)	はい	26	0	10	1	37
	いいえ	2	1	1	0	4
	わからない	23	1	6	0	30
	記入なし	1	0	0	4	5
	計	52	2	17	5	76



IV 「若年女性の育児に対する意識調査」について

短大における上記のアンケートをもとにして実施した調査の概略を紹介する。

1 目的

少子化社会での子育ての諸問題、特に育児不安の軽減のため、妊娠前の、更に結婚前の女性に対していかなる働きかけをすればよいのであろうか。若い女性たちは、子育てに関してどういう考えを持っているのかを調べるため、育児に対する意識調査を実施した。

ただし、調査は男女共学の教育施設において実施したため、アンケート調査は男女の学生を対象として実施し、結果の分析の際に必要なに応じて、女性のみ、または男性の回答も含めて分析した。

2 調査対象者と調査実施時期

対象者は、高等学校、専門学校、短期大学、4年制大学の学生である。実施時期は、平成15年7月から16年1月である。

3 調査方法

調査は、無記名・自記式アンケートで、原則として教室内で、クラス担任教諭または授業担当講師、もしくは研究者本人の立ち会いの下で実施した。用紙は個別の封筒に入れ、密封状態で回収し、プライバシーの保護に留意した。

4 調査内容

調査用紙は、B5版8頁からなる冊子形式で、諮問項目は6頁にわたり、7問からなる。選択肢から答えを選ぶものと、自由記載欄を設けたものを組み合わせた。

資料1によるアンケートの結果を踏まえて、家庭に対するイメージや乳幼児の発達の理解など、新たに項目を付け加えた。

また、()内への自由記載も詳しく記入する傾向が見られたので、大きな()を配置するようにし、調査内容を充実させた。

5 調査結果について

結果の詳細については、研究報告書1)及び参考文献2)を参照されたい。

V 考察

育児体験や少子化に対する意見など、積極的に意見を述べるとともに、調査に対する理解と協力の姿勢が見られた。育児体験や生育歴を振り返ることの重要性を認識し、少子化の実態を見極めてその原因を探り、保育制度や保育施設など育児を支援するシステムを充実させることをめざしている若い世代の姿勢が把握できた。

同時に、アンケート調査という日常的な調査方法も、質問内容の設定やプライバシー保護に配慮した回収方法などの工夫により、かなり個人的なことにまで立ち入った調査や詳細で具体的な意見の聴取が可能であることを再認識した。

VI 終わりに

今回のアンケートに協力してくださった児童福祉学科の学生さん、関係者の皆さんに感謝します。アンケート結果については数字のみ引用する旨お断りしていました。自由記載

の内容まで踏み込んで記載することについてもあらかじめ了解を得ておくべきでしたが、掲載方法に配慮をしたつもりですので、御了承いただきたく存じます。内容を活用することで回答者の熱意に報いたいと思います。

参考文献

- 1) 厚生労働科学研究（子ども家庭総合研究事業）「育児不安軽減のための小児科医の役割とプレネイタルビジットの評価に関する研究」平成15年度研究報告書，596～616，平成16年
- 2) 益邑千草：「若年女性の育児に対する意識調査—厚生労働科学研究『育児不安軽減のための小児科医の役割とプレネイタルビジットの評価に関する研究』研究報告—」東北公益文科大学総合研究論集，8，29～65，平成16年